青年期における内的作業モデルと自我同一性との関連

—危機および積極的関与という視点からの検討—

島田　　翼

（川畑　隆ゼミ）

問題と目的

本研究では青年期における内的作業モデル（Internal Working Model：以下IWM）と自我同一性（ego-identity）との関連を検討することを目的とする。IWMと自我同一性の両概念については，今日まで様々な研究が行われ，その知見が集積している。しかしその一方で研究者によっては概念内における異なる側面を混同するなど，しばしば概念の混乱が見られる。そこでまず，両概念についてのこれまでの研究を展望し本研究における定義を明確にする。

(1) 内的作業モデル（Internal Working Model）について

Bowlby（1973）の愛着理論では，人生の最早期に重要な他者（主に母親）との愛着経験を通して形成・内在化されたIWMは，生涯を通じてその後の対人関係や行動など，広範囲に影響を及ぼすと考えられている。IWMとは，愛着に関連する多様な情報の統合，あるいは注意，記憶，感情，行動などの体制化を進行させる個人特有の心的枠組みとして，個人の対人関係の在り方に一貫性と安定性をもたらす機能とされる。

愛着（attachment）とは，一般に子どもと重要な他者との間の情緒的絆を指すものとして捉えられがちであるが，厳密には個体（乳児）が危機的状況に陥った際，あるいはそのような危機を予測し，恐れや不安などのネガティブな情動が強く喚起された時に，特定の他の個体に接近し，主観的な安全の感覚（felt security）を回復，維持しようとする特性を指す。そのため個体にとって主要な愛着対象は，危機に瀕した際に逃げ込む避難所であると同時に，そこを拠点に外界を探索するための安全基地（secure base）となる。

愛着経験の内在化は，愛着経験に関するモデルの形成だけでなく，自己に関するモデルの形成についても相補的な形で進行する。養育者が支持的で応答的である場合，子どもは養育者をよいもの，安定したものとして内在化し，それに応じて自分を価値ある存在，愛される価値のある存在と認識するようになる。一方，養育者が拒否的で非応答的であるとき，子どもは養育者を悪いもの，不安定なものとして内在化し，それに応じて，自分は愛される価値のない存在であると認識するようになる。

また，Bowlbyは愛着をその主要な対象を少しずつ変えつつも，揺りかごから墓場まで生涯存続し，機能し続けるものとして位置付けていた。愛着経験を通じて形成されたIWMも同様に，特定の愛着対象との関係を離れても有効で，ポジティブなIWMを形成した子どもは，親との関係を離れてもその対人世界に寄せる信頼や高い自尊心により，一貫して安定した愛着行動を示す。逆にネガティブなIWMを形成した子どもは，その対人世界に対する不安や不信，自己に対する無価値観などから不安定な愛着行動を示す。このように，人生早期に形成されたIWMに基づいて対人情報を知覚，評価し，未来への予測を立て，行動のプランニングをしていく中で外的な愛着行動も一貫性と安定性を備えていく。

Ainsworth, et al.（1978）は，Bowlbyの愛着理論をストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure：以下SSP）という測定方法を用いて乳児の愛着型を実証的に測定した。SSPとは，新奇な実験室で乳児を養育者と分離させたり見知らぬ人（ストレンジャー）と対面させたりすることによって乳児をマイルドなストレス状況に

置き，そこでの乳児の反応を観察することによって乳児の愛着型を評定する実験法である。

SSPにより観察された愛着行動によって，以下の３つの愛着型に分類される。Ａ型は養育者との分離時に泣いたり混乱することが少なく，明らかに養育者を避けるような態度を示す。養育者を安全基地として探索行動を行うことが少ない。Ｂ型は養育者との分離時に混乱を示すが，養育者と再会すると積極的に身体接触を求め，容易に静穏化する。養育者だけでなくストレンジャーに対しても肯定的態度を示すことが多く，養育者との分離の際にもストレンジャーからの慰めを受け入れることができる。また，養育者を安全基地として積極的に探索活動を行うことができる。Ｃ型は養育者との分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には養育者に身体接触を求めるが，一方で養育者に怒りを向けるといった両価的態度を示す。全般的に行動が不安定で用心深い態度が認められる。養育者を安全基地として安心して探索行動を行うことができず，養育者に執拗にくっついていこうとする傾向がある。Ｂ型は安定型（secure type），Ａ，Ｃ型は不安定型（insecure type）とされる。

内的作業モデルの観点から見れば，Ａ型：回避型（avoidant type）は，養育者は拒否的で援助が期待できないという不信の経験から，他者一般に対しても拒否的であり，自己に対しても拒否的で自己充足的である。Ｂ型：安定型（secure）は，自己は援助される価値がある存在であり，他者は応答的で信頼に足るという内的表象を持つ。Ｃ型：両価型（ambivalent）は，養育者の一貫しない養育態度によって他者に疑惑を抱いた経験から，他者に対してアンビバレントな内的表象を持ち，見捨てられ不安や自己不全感が強い。

このような概念に基づき，青年期や成人期のIWM研究はMain and Goldwin（1984）のアダルト・アタッチメント・インタビュー，Hazen and Shaver（1987）による質問紙やBartholomew and Horowitz（1991）による質問紙などを用い，愛着型の安定―不安定における違いについて様々になされてきた。

Hazen and Shaver（1987）は，Ainsworth, et al.（1978）のSSPに基づき，愛着型を３カテゴリーに分類する成人用愛着尺度（単一項目強制選択方式）を作成した。しかし，尺度としての信頼性・妥当性の問題が指摘され，国内では詫摩・戸田（1988）がこの成人用愛着尺度をもとに，成人期のIWMを多項目的・多次元的に測定する尺度を開発した。３カテゴリー尺度の場合では，安定型と２つの不安定型である回避型，両価型を想定している。またBartholomew and Horowitz（1991）は，BowlbyのIWMの定義である自己観についてのIWMと他者観についてのIWMの２因子構造に注目し，それぞれのIWMがポジティブかネガティブかによって安定型と3つの不安定型（恐れ型，とらわれ型，拒絶型）に分類する4カテゴリー尺度を提出した。3カテゴリー尺度の安定型，回避型，両価型はそれぞれ4カテゴリー尺度の安定型，恐れ型，とらわれ型に対応することが確認されている（中島・加藤，2003）。

本研究ではAinsworth, et al.（1978）の理論に基づきHazen and Shaver（1987）が作成した尺度を参考に詫摩・戸田（1988）が作成した3カテゴリー尺度を用いてIWMを３つの型から捉えることとする。しかし，山岸（1997）は，詫摩・戸田（1988）の尺度を包括的な概念としてのIWMではなく，「個人が持つ対人関係の枠組み，自己や他者のあり方に対する表象」という狭い意味でのIWMとして取り上げている。そのため，本研究では山岸（1997）の指摘を考慮し，「個人が持つ対人関係の枠組み，自己や他者のあり方に対する表象」（山岸，1997）として３カテゴリー（安定型・回避型・両価型）のIWMを定義する。

(2) 自我同一性（ego-identity）について

自我同一性とは，Erikson, E. H.（1959）が提唱した心理社会的発達理論における中核的概念であり，「自我の斉一性・連続性・帰属性」の３つの基準からなる自己意識の総体であるとされる。

Eriksonは，人の生涯発達を心理社会的側面から捉えたライフサイクル論を提出した。Eriksonによると，人は発達の各段階において，内的欲求と外的環境としての社会からの制約との間の葛藤から，心理社会的危機を生じるとされる。危機とは，機会や契機という意味合いを含んでおり，それぞれの発達段階の課題に直面したときの葛藤状

況・事態を示す概念である。その段階における危機を脱することができれば，その後の人生において望ましい精神的成熟が可能になるとされるが，脱することができなければ，その危機はその後の人生にも影響を及ぼすとされる。このEriksonの発達理論の中でも特に重要であるのが青年期の課題である自我同一性の問題である。

Eriksonの自我同一性の定義に関する記述によれば，自我同一性には「自我の斉一性・連続性」という自我の一貫性があり，それが時間的連続性を有しているという主観的確信が必要であるとされる。言い換えるならば，「自分は他ならぬ自分である」という主観的感覚を有していることが必要といえる。

また，Eriksonは他者が自分に対して抱いている「自我の斉一性・連続性」の感覚が，自分自身が感じている「自我の斉一性・連続性」と一致することの重要性を述べている。これは「重要な他者から認めてもらえているであろうという内的確信」(Erikson，1959）の感覚であり，社会への「帰属性」の感覚といえる。ここでEriksonのいう「社会」とは，国家や文化といった大規模なものから，重要な他者という小規模なものまで幅広い内容を含む（杉村，1998)。この見方は，他者との関係性が同一性の形成に重要であるという視点に寄与するものである。

さらに，Eriksonは「自我の斉一性・連続性」が単に過去から現在において一貫性と時間的連続性を有するだけでなく，未来に向けての一貫性と時間的連続性を有していることの重要性を述べている。このことから，自我同一性の形成には時間的展望を備えた「自分がどこに向かっているのかよく分かっている感覚」(Erikson，1959）が必要といえる。

つまり，自我同一性とは，「自我の斉一性・連続性・帰属性」という３つの基準から，自己のイメージについての時間的連続性や一貫性，独自性などの「主観的意識の同一性」という側面と，自分と社会との繋がりや社会からの承認や受容の感覚などの「社会的同一性」という側面の２側面からなるものであるといえる。自我同一性の確立は青年期の課題であり，この時期において，「本当の自分とは何か」「自分は社会からどう見られているか」「自分が期待されている役割は何か」という問いが生じる。

「自我同一性の達成　対　自我同一性の拡散」の課題が青年期に位置付けられている理由としては，青年期には以前から形成されてきた自己像および他者一般に関する認識の捉え直しが行われ，そこで作り上げた新たな価値観に基づき，自己および他者一般に関する意識の再統合が行われることに由来する。自己意識が再統合される過程で青年は身体的・精神的成熟や社会的責任などの点において心理・社会的な危機を経験し，これを克服すべく自分の可能性を模索する。この見方は，葛藤したり苦闘したりすること，つまり自己確立の問題に正面から取り組み自己探求をすることによって，アイデンティティが形成されていくと捉える立場といえる。

このような観点から，Marcia，J．E．（1966）は自我同一性の中核として，政治観・宗教観・職業観の３つを挙げ，それらに関する「危機：crisis」と「積極的関与：commitment」の２変数の組み合わせによって４つの同一性地位（identity status）を見出した。ここでいう「危機」とは，Eriksonのライフサイクル論における機会や契機という意味合いではなく，自分にとって大事な決定や選択に対して，真剣に試行錯誤した時期の在り方を問うものである。「積極的関与」とは，自分に向けた問いや自分が対峙した課題に対して，どれだけ積極的で主体的な関与をしているかを問うものである。そのため，アイデンティティ・ステイタスは同一性の形成という課題への解決様式であるといえる。

加藤（1983）は，Marciaが示したアイデンティティ・ステイタスの概念に基づき，「同一性達成―権威受容中間地位」と「同一性拡散―モラトリアム中間地位」の２つを加えて，アイデンティティ・ステイタスを客観的に判定する同一性地位尺度を作成した。「積極的関与」に関しては，「現在の自己投入」という用語で表現され，「危機」に関しては，「過去の危機」と現在の「危機」である「将来の自己投入の希求」という２つの用語に分けて検討している。

ところで，自我同一性に関する研究の流れは，自我同一性の感覚を特性論的に測定する研究と類

型論的に分類するアイデンティティ・ステイタス・アプローチに大別されるであろう。加藤（1986）は前者を「アイデンティティを“混乱”から“成立”に至る１次元的連続体とみなすアプローチ」とし，後者を「同一性を規定する心理社会的要因の組み合わせによって，質的に異なるいくつかの同一性を定義するアプローチ」であると述べている。

しかし，谷（2001）は同一性地位尺度の問題点として，一般に類型論的方法の問題として指摘されるように，多様な様相を少数の類型に限定してしまうことによって詳細な特性や個人差を検討できないこと，またEriksonが自我同一性の中核として述べている「自我の斉一性・連続性」や自己に関する自他の認識の一致である「帰属性」などに焦点が当てられていないことなどを挙げている。このことから，同一性地位尺度では，他者との関係性という視点ではなく，自身が自分の重要な領域に対してどれだけ傾倒し，試行錯誤をしたのかを問う「危機」と「積極的関与」という視点から同一性が定義されているといえる。また，同一性地位尺度は同一性の形成のプロセスを段階的に捉えていく上で有効である。そこで本研究では，「関係性」ではなく「危機」および「積極的関与」という視点から同一性を定義することとする。

(3) 内的作業モデルと自我同一性との関連

同一性の感覚は発達早期からの母子関係の中で形成されていくプロセスであり，同一性の形成には乳児期と幼児期における養育者との関係性が重要であると考えられている。

Eriksonの発達理論における乳児期（０～１歳頃）の課題は「基本的信頼　対　不信」であるが，ここで形成される基本的信頼は，重要な他者との間で形成される安定した愛着によってもたらされるものであり，健康的なパーソナリティの重要な要素と考えられている。基本的信頼の中には他者に対する信頼と自分自身に対する信頼の２つが含まれていると考えられており，これは養育者との間で形成された愛着に基づいて自己と他者に関する内的な表象モデルを相補的に形成していくというBowlbyの愛着理論と対応するものである。

次いで，幼児期（１歳半頃～３歳頃）の課題は「自立　対　恥・疑惑」であるが，子どもはこの期間に自分の行動は自分で制御可能であることを発見し，自立性を発達させる。この時期の葛藤は，どの程度まで自立心を発揮し，しかも親への依存を持ち続けるかということである。養育者の課題としては，幼児の自立心を損なわず，しかし幼児が甘えてきたら受け入れるという幼児と養育者の適切な距離感を見出すことである。この時期の経験によって，将来幼児が他者との間で適切な距離感を発見できるのかどうかが決定される。

このように，乳児期と幼児期の時期を適切に通過できないと，人は他者との関係において適切な距離感を発見できず，依存的，回避的，両価的な対人態度を示す。

アイデンティティ発達を愛着から捉えたものとして，Franz, C. E. & White, K. M.（1985）の研究が挙げられる。Franz & Whiteは成人のアイデンティティを理解する際，人格発達の重要な側面である愛着に注目する必要性を述べ，Eriksonの発達図式を一部修正し，個体化経路と愛着経路からアイデンティティ発達を捉える「生涯発達に関する複線モデル（two-path model）」を提出した。Franz & Whiteによると，この２つの経路は「独立してはいるが相互に関係を持つ」要素であるという。

山田・岡本（2008）はFranz & White（1985）の研究に依拠し，青年のアイデンティティを「個」と「関係性」という側面から検討している。「個」としてのアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線モデル（two-path model）」（Franz & White, 1985）の個体化経路に沿って発達し，自己の能力に対する信頼感を基盤に，個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していくアイデンティティの側面である。「関係性」に基づくアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線モデル（two-path model）」（Franz & White, 1985）の愛着経路に沿って発達し，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していくアイデンティティの側面である。この２つの側面は互いに補完し合う関係にあり，両者が絡み合いながらアイデンティティの形成・確立がなされると考えられる（山田・岡本，2008）。

以上のことからも，アイデンティティの問題を考える際には，青年期に至るまでの経験の中で形成されてきた対人関係も検討する必要があることがわかる。「自分」という存在を確かに感じることは一人ではなし得ないし，他者を自分と同等の存在として確かに感じとる体験があって初めて実現する。つまり，相互に促進しあうような関係を，人生の過程でいかに持ちえるかがアイデンティティ形成の上で重要な問題と考えられる。

安定した愛着対象との経験から安定したIWMを形成した子どもは，自分を取り巻く世界への信頼と自己肯定感から容易に他者に接近することができる。そして，そのようなIWMに基づき安定した対人関係を築いていくことができる。しかし，不安定な愛着対象との経験から不安定なIWMを形成した子どもは，自分を取り巻く世界に対する不信感と自己不全感，見捨てられ不安などから，回避的あるいは依存的な対人関係に陥りやすい。そのため不安定なIWMを持つ人は，アイデンティティの形成上必要な他者との「関係性」の構築が困難であると考えられる。

本研究における同一性は他者との「関係性」ではなく，傾倒や試行錯誤の程度である「危機」および「積極的関与」を定義の基準としている。しかし，IWMが自己および他者についての内的表象に基づき，対人関係およびそれに関連する事象を理解する際の枠組みとして機能する性質であることを踏まえると，傾倒や試行錯誤の際にもIWMが影響を与えると考えられる。例えば，天貝（1995）の信頼感とアイデンティティとの関連を検討した研究では，個人の心の中に自分や他者に対する信頼感が存在することは，自己を探究する際の大きなサポート源になる可能性を示唆している。以上の所見に基づき，自己および他者の内的表象であるIWMと同一性形成の在り方である同一性地位との関連を検討する。

方　法

調査対象

京都学園大学に所属している大学生を対象として質問紙調査を実施した。合計152名であった。記入漏れのあったデータについては使用しなかったため，有効回答数は144名（男性87名，女性57名，平均年齢20.38歳）であった。有効回答率は94.7%であった。

調査期間

2008年７月，授業時間内に質問紙を配布，実施した。また個別に依頼して配布，実施した。

尺度

(1)　内的作業モデル尺度

この尺度はHazen and Shaver（1987）の尺度を参考に，詫摩・戸田（1988）が成人のIWMの質を評価するために作成した尺度である。自己および対人関係に関する表象から，乳幼児期の愛着型（安定型・回避型・両価型）に対応したIWMの特性を測定するように構成されている。安定尺度・回避尺度・両価尺度各６項目，全18項目からなり，「全くあてはまらない（１点）」から「非常によくあてはまる（６点）」の６件法で回答を求めた。

(2)　同一性地位判定尺度

この尺度はMarcia（1966）の同一性地位概念に基づいて，加藤（1983）が同一性地位を簡便に判定するために作成した尺度である。「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」（各４項目，全12項目）の各得点（「全然そうではない（１点）」から「まったくそのとおりだ（６点）」の６件法）の高低の組み合わせによって，以下の同一性地位に分類される。

① 同一性達成地位（A）：過去に高い水準の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者。
② 権威受容地位（F）：過去に低い水準の危機しか経験せず，現在高い水準の自己投入を行っている者。
③ 同一性達成―権威受容中間地位（A－F中間地位）：中程度の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者。
④ 積極的モラトリアム地位（M）：現在は高い水準の自己投入は行っていないが，将来の自己投入を強く求めている者。
⑤ 同一性拡散地位（D）：現在低い水準の自己投入しか行っておらず将来の自己投入の希求も弱い者。
⑥ 同一性拡散―積極的モラトリアム中間地位

（D－M中間地位）：現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで，その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが，将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者。

また，分類の基準となる値は加藤（1983）の先行研究の分類に従って，「20点：かなりある〔かなりあった〕」，「14点：ある〔あった〕ともない〔なかった〕ともいえない」，「12点：どちらかといえばない〔なかった〕」とした。

結　果

(1)　内的作業モデル尺度の分析

内的作業モデル尺度18項目について主因子法・Varimax回転による因子分析を行った。固有値と尺度の構成概念を考慮し，3因子を抽出した。3因子の累積寄与率は43.60％であった。詫摩・戸田（1988）の先行研究を参考に，第1因子を「安

表1　内的作業モデル尺度の因子分析結果（主因子法・Varimax回転）

尺度項目（α＝.590）	1	2	3	共通性
安定尺度（α＝.87）				
16　私はすぐに人と親しくなる方だ	.933	-.024	-.061	.874
4　初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある	.972	-.218	.024	.675
7　私は知り合いができやすい方だ	.762	-.079	-.034	.587
13　たいていの人は私のことを好いてくれていると思う	.716	-.096	-.206	.564
1　私は人に好かれやすい性質だと思う	.596	-.240	-.165	.440
10　気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.473	-.096	-.143	.221
両価尺度（α＝.77）				
8　時々友達が，本当は私を好いてくれていないのではないかとか，私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	-.015	.818	.136	.688
5　ちょっとしたことで，すぐに自信をなくしてしまう	-.215	.679	-.022	.508
17　あまり自分に自信がもてない方だ	-.233	.648	.091	.483
2　人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	-.165	.536	.265	.384
11　自分を信用できないことがよくある	-.147	.511	.215	.329
14　私はいつも人と一緒にいたがるので，ときどき人から疎まれてしまう	-.004	.303	-.035	.093
回避尺度（α＝.70）				
9　どんなに親しい間柄であろうと，あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	-.044	.087	.686	.479
15　あまり人と親しくなるのは好きではない	-.227	.017	.597	.408
3　あまりにも親しくされたり，こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると，イライラしてしまう	-.045	.114	.548	.316
6　人は全面的に信用できないと思う	-.132	.270	.543	.385
12　人に頼るのは好きでない	-.083	.109	.510	.279
18　私は人に頼らなくても，自分一人で充分にうまくやって行けると思う	.004	-.194	.310	.133
因子の寄与	3.37	2.46	2.02	
因子の寄与率（％）	18.67	13.69	11.26	

定」因子，第２因子を「両価」因子，第３因子を「回避」因子と解釈した。Cronbachの α 係数は.87～.70であり，いずれも一応の信頼性を有しているといえる（表１）。

因子分析により得られた３因子を構成する下位尺度各６項目についての平均得点と標準偏差を表２に示した。また，男女別に内的作業モデル下位尺度の平均値を検討したところ，男性よりも女性の方が「両価」得点が有意に高かった（$t(142)=2.93, p<.01$）。

次に，高井・丸島（2006）の手続きに従って愛着型の分類を行った。まず，下位尺度ごとのＺ得点（尺度得点－平均尺度得点）を算出し，各下位尺度Ｚ得点のうち最も高いＺ得点を示したものをその人の愛着型とした。分類された愛着型の人数と比率は表３の通りである。なお，最高Ｚ得点が２つ以上重複した者はいなかった。

(2) 同一性地位判定尺度の分析

各地位への分類は加藤（1983）の先行研究の分類に従って，図１のように行った。分類された各同一性地位の人数と比率は表４の通りである。

また，調査対象者全体の下位尺度の平均得点と標準偏差を求めたものを表５に示した。男女別に下位尺度の平均値を検討したところ，男性よりも女性の方が「過去の危機」が有意に高い得点を示した（$t(142)=2.31, p<.05$）。

表２　内的作業モデル下位尺度の平均得点と標準偏差

	平均得点	標準偏差	t 値
安定	20.3(20.6/19.8)	6.3(6.3/6.4)	.70
両価	21.7(20.6/23.5)	6.0(6.3/5.0)	2.93 **
回避	19.1(19.1/19.1)	5.9(5.6/6.3)	.04

注　() 内左が男性，内右が女性。 **p<.01

表３　愛着型の人数と比率

	N	%
安定型	58（39/19）	40.3（44.8/33.3）
両価型	55（31/24）	38.2（35.6/42.1）
回避型	31（17/14）	21.5（19.5/24.6）
合計	144（87/57）	100.0

注　() 内左が男性，内右が女性。

表４　各同一性地位の人数と比率

	N	%
同一性達成	25（14/11）	17.4（16.1/19.3）
権威受容	1（1/0）	0.7（1.1/0）
A－F 中間	10（5/5）	6.9（5.7/8.8）
積極的モラトリアム	6（3/3）	4.2（3.4/5.3）
同一性拡散	19（14/5）	13.2（16.1/8.8）
D－M 中間	83（50/33）	57.6（57.5/57.9）
合計	144（87/57）	100.0

注　() 内左が男性，内右が女性。

表５　同一性地位下位尺度の平均得点と標準偏差

	平均得点	標準偏差	t 値
現在の自己投入	16.0 (15.7/16.4)	4.4 (4.7/4.0)	.94
過去の危機	18.2 (17.6/19.0)	3.5 (3.5/3.5)	2.31*
将来の自己投入の希求	16.0 (16.0/16.1)	3.4 (3.5/3.2)	.27

注　各セルの上段が全体，

下段（）内左が男性，内右が女性。 *p<.05

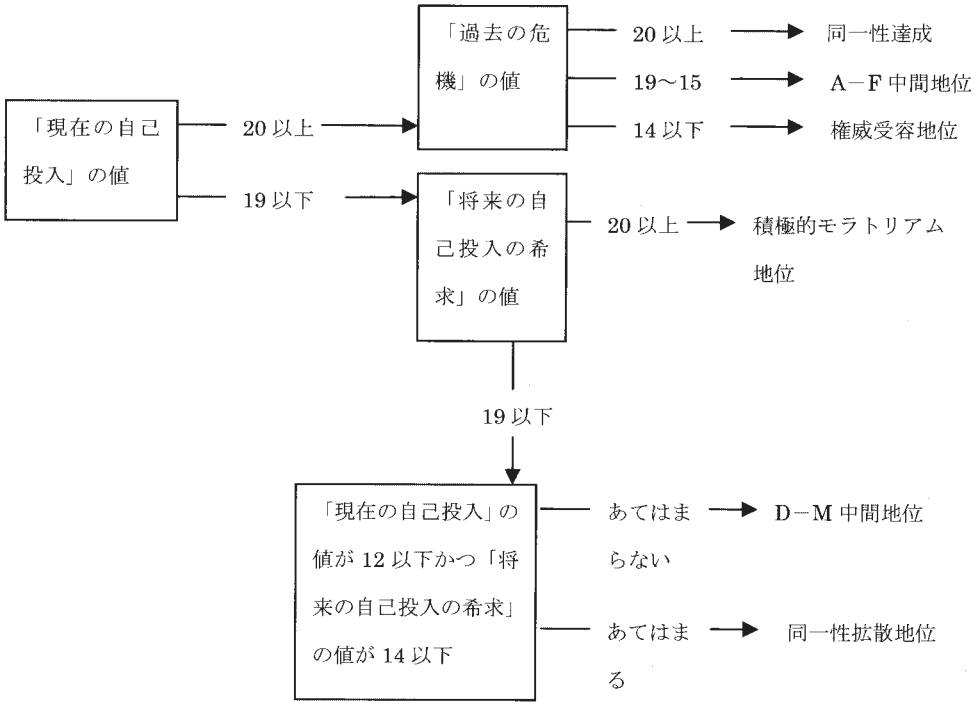

図1　各同一性地位への分類の流れ図（加藤，1983）

表6　内的作業モデル尺度と自我同一性地位尺度の尺度得点の相関

	安定	両価	回避
現在の自己投入	.156 (.139/.202)	−.232** (−.303**/−.161)	−.173* (−.303**/.026)
過去の危機	.137 (.190/.092)	.066 (−.022/.108)	−.149 (−.058/−.282*)
将来の自己投入の希求	.291** (.317**/.255)	−.146 (−.204/−.058)	−.284** .277**/−.298*)

注　*p<.05, **p<.01
各セルの上段が全体，下段（）内左が男性，内右が女性。

(3) IWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連

IWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連を検討するために，内的作業モデル尺度と自我同一性地位尺度の尺度得点の相関を求めた（表6）。

その結果，「安定尺度」と「将来の自己投入の希求」との間に低い相関が認められた（r=.291，p<.01）。「両価尺度」では「現在の自己投入」との間に低い負の相関が認められ（r=−.232，p<.01），「回避尺度」では「現在の自己投入」（r=−.173，p<.05）と「将来の自己投入の希求」（r=−.284，p<.01）との間にそれぞれ低い負の相関が認められた。

なお男女別の相関についても検討したところ，「安定尺度」と「将来の自己投入の希求」との間に，男性のみ低い相関が認められた（r=.317，p<

.01)。「両価尺度」では「現在の自己投入」との間に，男性のみ低い負の相関が認められ（r=－.232，p<.01），「回避尺度」では「現在の自己投入」との間に，男性のみ低い負の相関が認められた（r=－.303，p<.01）。また，「回避尺度」と「過去の危機」との間では，女性のみ低い負の相関を示し（r=－.282，p<.05），「回避尺度」と「将来の自己投入の希求」との間には，男女共に低い負の相関が認められた（r=－.277，p<.01：r=－.298，p<.05）。

次に分類された愛着型とアイデンティティ・ステイタスとの関連を検討するために，χ2検定を行った（表7）。その際，「権威受容地位」と「積極的モラトリアム地位」は極端に人数が少なかったため，「権威受容地位」は「A－F中間地位」と，「積極的モラトリアム地位」は「D－M中間地位」と併せて全体で4類型として検討した。その結果，愛着型とアイデンティティ・ステイタスとの間に有意な関連は認められなかった（χ2=2.70，df=6，ns）。

さらに，アイデンティティ・ステイタスを規定する3変数である「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」を目的変数とし，IWMの特性である「安定尺度」，「両価尺度」，「回避尺度」を説明変数とする重回帰分析を行った（表8）。その結果，「両価」特性は「現在の自己投入」に対して負の影響を及ぼしていることが示された（β=－.18，p<.05）が，その説明率は相対的に低かった。また，男女別に検討したところ，男性の場合であると，「安定」特性は「将来の自己投入の希求」に対して正の影響を（β=－.23，p<.05），「回避」特性は「現在の自己投入」に対して負の影響を及ぼしていることが示された。女性の場合であると，回帰式は有意ではないが，「回避」特性が「過去の危機」に対して負の影響を及ぼしていることが示された（β=－.29，p<.05）。

考　察

(1)　内的作業モデル尺度の検討

内的作業モデル尺度18項目について因子分析を行ったところ，詫摩・戸田（1988）の先行研究同

表7　愛着型とアイデンティティ・ステイタスの類型パターン

			愛着型			
			安定型	両価型	回避型	合計
アイデンティティ・ステイタス	地位	同一性達成	11（8/3） 7.6（9.2/5.3）%	9（4/5） 6.2（4.6/8.8）%	5（2/3） 3.5（2.3/5.3）%	25（14/11） 17.4（16.1/19.3）%
	中間地位	A－F	6（2/4） 4.2（2.3/7.0）%	3（3/0） 2.1（3.4/.0）%	2（1/1） 1.4（1.1/1.8）%	11（6/5） 7.6（6.9/8.8）%
	拡散地位	同一性	7（5/2） 4.9（5.7/3.5）%	6（4/2） 4.2（4.6/3.5）%	6（5/1） 4.2（5.7/1.8）%	19（14/5） 13.2（16.1/8.8）%
	中間地位	D－M	34（24/10） 23.6（27.6/17.5）%	37（20/17） 25.7（23.0/29.8）%	18（9/9） 12.5（10.3/15.8）%	89（53/36） 61.8（60.9/63.2）%
	合計		58（39/19） 40.3（44.8/33.3）%	55（31/24） 38.2（35.6/42.1）%	31（17/14） 21.5（19.5/24.6）%	144（87/57） 100.0%

注　各セルの上段が全体，下段が%，（）内左が男性，内右が女性

表8　同一性地位3変数を目的変数，内的作業モデル下位尺度を説明変数とする重回帰分析

	R^2	F	標準偏回帰係数（β）		
			安定	両価	回避
現在の自己投入	.05	3.61*	.07	−.18*	−.11
	(.11/.01)	(4.45 **/1.13)	(.02/.19)	(−.22/−.12)	(−.23*/−.10)
過去の危機	.03	2.67	.15	.16	−.15
	(.00/.06)	(1.12/2.13)	(.20/.06)	(.06/.18)	(−.04/−.29*)
将来の自己投入の希求	.16	7.21***	.24	−.01	−.26
	(.12/.07)	(4.88 **/.2.45)	(.26**/.20)	(−.05/.05)	(−.21/−.25)

注　*p<.05, **p<.01, ***p<.001
各セルの上段が全体，下段（）内左が男性，内右が女性。

様，「安定」，「両価」，「回避」の3因子が得られた。この結果は，本尺度を使用した他の先行研究も同様の結果を示していることから妥当な結果といえる。

また，男性よりも女性の方が「両価得点」が有意に高く，3類型の愛着型の中でも女性は「両価型」の比率が最も大きかった。この結果は，女性は男性よりも他者に対して信頼と不信のアンビバレントな内的表象を持ちやすく，そのために自分自身も自己不全感や見捨てられ不安を抱きやすいという両価的な特性の傾向を示唆していると思われる。

(2)　自我同一性地位尺度の検討

まず，各同一性地位への分類を行ったところ，加藤（1983）の先行研究同様D−M中間地位が過半数を占める結果となった。加藤（1983）によれば，この群は日本の大学生に見られる「モラトリアム」にあたるとしているが，時代の経過によって青年達の在り方も変化していると思われる。そのため，同一性地位の判定基準を今後再検討する必要があるだろう。

「過去の危機」に関しては，男性よりも女性の方が有意に高い得点を示した。「過去の危機」とは加藤（1983）によれば，「（過去の）危機（に対する現在）の認知」とされる。そのため，女性においては自分自身の過去における出来事や葛藤を内省し，その意味をどのように位置づけるかが自我同一性の形成に関係すると思われる。

(3)　ＩWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連についての検討

安定したIWMを持つ個人は安定した対人関係を築くことができるため，アイデンティティの形成も比較的容易であろうが，不安定なIWMを持つ個人は不安定な対人関係に陥りやすいため，アイデンティティの形成上必要な他者との「関係性」の構築が困難であると考えられる。本研究における同一性の定義は他者との「関係性」ではなく，「危機」および「積極的関与」の側面を基準としており，「関係性」の側面は含まれないものの，心的枠組みとして機能するIWMの性質上，傾倒や試行錯誤の在り方にも影響を及ぼす可能性が考えられる。つまり，「危機」および「積極的関与」の側面にも「関係性」という側面が含まれるのではないだろうか。このような仮説に基づき，IWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連の検討を行った。

分類された愛着型とアイデンティティ・ステイタスとの関連を検討するために$\chi 2$検定を行ったところ，有意な関連は認められなかった。しかし，研究者によって操作的に定義された分類基準における検討のみでは，IWMがアイデンティティ・ステイタスの規定因に与える影響を説明し得ていない。そこで，IWMの3つの下位特性を説明変数とし，アイデンティティ・ステイタスの規定因である3変数を目的変数とした重回帰分析を行った。なお，内的作業モデル尺度と同一性地位判定尺度の尺度得点の相関について検討した結果，重

回帰分析の結果とほぼ同様の結果を示したため併せて考察することとする。

まず，IWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連については，男性のみ「安定」特性が「将来の自己投入の希求」に対して正の関連を示していた。天貝（1995）の先行研究では，自分への信頼感は「現在」および「将来」にわたる「自己投入」に影響を及ぼしているのに対し，他者への信頼感は「現在の自己投入」よりも「将来の自己投入の希求」により関連しているとした。つまり，他者への信頼感は自分の「将来への自己投入の希求」に影響を及ぼしている可能性が示唆されたといえる。本研究においては，自己および他者に関する安定した内的表象を持つ安定型は，「将来の自己投入の希求」にのみ関連があるという結果を示した。これは自己および他者への信頼感が「将来の自己投入の希求」に影響を及ぼすという天貝（1995）の仮説を一部支持するものであった。あるいは，天貝（1995）の仮説に依拠するならば，本研究の調査によって得られた内的作業モデル尺度の「安定」因子は，自己への信頼感ではなく他者への信頼感を主な成分としている可能性がある。

Bowlbyの愛着理論によれば，人は加齢に伴い徐々に他者に対して物理的接近をしなくなるが，アタッチメントは次第に表象レベルの接近に変化していくとされる。すなわち，危機の際には誰かに確実に保護してもらえることに対する信頼感へと形を変えて，生涯にわたって働き続けると考えられている。個体はこうした安全の感覚に支えられて，外界への探索活動や学習活動を安定して行い，相対的に円滑な対人関係を構築することが可能になるのだと考えられている。天貝（1995）は，先述したように個人の心の中に自分や他者に対する信頼感が存在することは，自己を探究する際の大きなサポート源になる可能性を示唆しているが，これは上記のBowlbyの愛着理論を支持する見解であると思われる。

また，Brandt，D．E．（1977）はEriksonの青年期における「アイデンティティ形成：identity formation」とMahlerの幼児期における「分離－固体化過程：separation - individuation process」の類似性について検討している。Brandt（1977）によれば，幼児期における依存的な母子の二者関係からの脱却というプロセスとその葛藤は，文脈は異なるものの青年期においても同様に展開するとしている。Brandt（1977）が検討した両理論の類似性の中でも，特に「練習期」における考察は本稿を考える上で大変興味深い示唆があった。Brandt（1977）によれば，「練習期」において，幼児が「安全基地」である母親を拠点に外界を探索するのに対し，青年期もまた心理社会的モラトリアムの期間といわれるように社会的役割を模索していくという点で同様であるとしている。Brandt（1977）の考察を踏まえると，天貝（1995）の個人の心の中に自分や他者に対する信頼感が存在することは，自己を探究する際の大きなサポート源になるであろうという仮説は，「練習期」における幼児だけにいえることではなく，青年期以降も同様のことがいえると考えられる。つまり，心の中に「安全基地」である「重要な他者」が存在することは，自己を探究する際の不安を軽減し安心感を供給するため，自己の探究を促す源になるであろうという解釈ができる。

さらに，乳児期において母子間での「基本的信頼」を獲得したであろうと思われる安定愛着型の個人は，Eriksonが述べた時間的展望を備えた「自我の斉一性・連続性」の感覚，つまり，「自分がどこに向かっているのかよく分かっている感覚」（Erikson，1959）を備えているものと思われる。そのため，自分が将来積極的に関与する領域に向けての「将来の自己投入の希求」を有することは，「未来においても私は他ならぬ私であろう」，だから「私はこれからもやっていける」という内的確信を有しているといえる。加えて，SSPで見られるB型（安定型）の特徴としては，ストレンジャーに対しても肯定的態度を多く示し，養育者の不在時にもストレンジャーからの慰めを受け入れることができ，養育者を安全基地として積極的に探索活動を行うことができることなどが挙げられる。

以上の考察とSSPにおける特徴，天貝（1995）の仮説から，安定した愛着型の個人，特に男性においては，時間的展望を備えた「自我の斉一性・連続性」の感覚を有し，危機に際しても他者を容易に頼ることができ，重要な他者（青年期の重要な他者は同年の友人であろう）を安全基地としてアイデンティティ危機に臨むのであろうと考えら

れる。したがって，青年期における安定した愛着型の男性は，「私が壁にぶつかった時，友人や他の人はきっと私を支えてくれるだろう。だから，これから先に壁にぶつかることがあってもきっと大丈夫だろう。」というように，他者への信頼から得られる安心感に支えられアイデンティティ危機を乗り越えるであろうと思われる。

次に，「両価尺度」と「現在の自己投入」との間には，特に男性において低い負の関連が認められた。この結果から，自己および他者に対してアンビバレントな内的表象を有している男性は，自分の重要な領域に対して関与する際にも，他者に対して信頼を寄せられず自己に対しても不全感を持つために，「私が一生懸命何かに打ち込んでいても，他の人は私を支えてくれないかもしれない。」というように，他者からのサポートを確信できないと思われる。加えて，SSPにおけるC型（アンビバレント型）は養育者を安全基地として安心して探索行動を行うことができず，全般的に行動が不安定で用心深い態度が認められるという特徴を持つため，青年期においても自分の重要な領域への積極的関与に対して躊躇あるいは慎重になってしまう傾向があると思われる。

「回避尺度」の場合であると「現在の自己投入」との間に，特に男性において低い負の関連が認められ，「過去の危機」との間では，女性のみに低い負の関連が認められた。また，「将来の自己投入の希求」との間には男女共に低い負の関連が認められた。SSPにおけるA型（回避型）は，養育者は拒否的で援助が期待できないという不信の経験から，養育者を安全基地として探索行動を行うことが少なく，他者一般に対しても拒否的であり，自己に対しても拒否的で自己充足的であるという特徴を持つ。

このことから，自己充足的で他者に対して回避的な内的表象を有している男性は，自分の重要な領域への関与に際して，「私は他の人からの援助を期待しない。私一人でやっていく。」というように，他者からのサポートを期待しない可能性が示唆された。しかし，自分の重要な領域に臨むことは多大なエネルギーを要する作業であり，他者からのサポートを排することは「安全基地」が無いに等しい状況を作り出すと思われる。そのため，自己探求に要する「安心感」を他者から供給することができず，「本当にこれでよいのだろうか」という「不安」が高まり，自己探求の継続が困難になると考えられる。

IWMの「回避」特性と「過去の危機」との間に，女性のみ低い負の関連が認められた。「過去の危機」においては先述したように，女性の自我同一性の形成には自分自身の過去における出来事や葛藤をどのように位置づけるかが関係する可能性が示唆された。この結果から，自己充足的で他者に対して回避的な内的表象を有している女性は，過去の出来事や葛藤についての意味をネガティブに位置付けする傾向があると考えられる。おそらく，自己をサポートし得るような他者を排した状況では，ある出来事や葛藤の一側面にしか焦点が当てられず，自己充足的な内省に終わってしまうため，ネガティブな事象に対するリフレーミングが難しいのではないかと考えられる。

また，「回避」特性と「将来の自己投入の希求」との間にも低い負の関連が認められたが，回避型の個人は安定型の個人とは対照的に，乳児期における「基本的不信」が「基本的信頼」を上回っていると思われる。そのため，時間的展望を備えた「自我の斉一性・連続性」の感覚が希薄であり，「私はどこに向かっていくのだろうか。」というように，未来における自己像をイメージすることが困難であると思われる。加えて，A型（回避型）は他者を安全基地として探索行動を行うことが少ないという特徴を持つため，危機に際しても「安全基地」である他者から援助を受けることが出来ず（あるいは拒否して），アイデンティティ危機に臨むこととなる。自分が将来関与する領域について正面から向き合うことは，「積極的関与」と同様に多大なエネルギーを要する作業であるため，「安全基地」からの援助を受けることが出来ない状況では「危機」に耐え得ることが困難であろうと思われる。

最後に，本研究で見られたアイデンティティ形成における性差の特徴について述べる。杉村（1998）は，青年期におけるアイデンティティの形成を関係性の観点から捉え直す試みをしており，アイデンティティ形成の際に見られる性差は関係性の利用の仕方における程度や質の問題であって，

男女共に関係性は重要であると述べている。一方，Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. (1979) は，青年期におけるアイデンティティ発達経路の男女差について，アイデンティティ・ステイタス面接を行い検討している。彼らの考察によると，アイデンティティ形成において男性は競争や知識といった領域に対する関与や試行錯誤が重要であるのに対し，女性は誰とどのように関わっていくのかといった関係性の領域に対する問いかけが重要であるとしている。これらは，自分自身の重要な領域に対する関与の程度である「現在の自己投入」や，現在の問題に対する試行錯誤の程度である「将来の自己投入の希求」への関連を示した男性の特徴を支持する見解であると思われる。また，過去の事象に対する認知の程度，つまり過去における事象との葛藤の程度を表す「過去の危機」には女性との関連が認められた。Hodgson & Fisher (1979)の研究に依拠するならば，女性の「過去の危機」に対する捉え直しは，他者との関係性を含む葛藤の捉え直しである可能性が考えられる。

(4) まとめと今後の課題

本研究では，青年期におけるIWMとアイデンティティ・ステイタスとの関連を検討した。その際，IWMを「個人が持つ対人関係の枠組み，自己や他者のあり方に対する表象」（山岸，1997）として定義し，自我同一性を「危機」および「積極的関与」からなる側面と定義して，両概念の関連を検討した。その結果，アイデンティティ形成のための試行錯誤には，他者からのサポートをどのように受け取ることが出来るかといった対人関係の枠組みが影響を与える可能性が示された。つまり，「危機」および「積極的関与」の側面であっても，他者との「関係性」は影響力を持つと考えられるため，アイデンティティ概念と「関係性」という側面は不可分な関係にあるといえる。

また，本研究ではIWMとアイデンティティの両概念内における一側面を定義の基準とし，検討を行ってきた。今後の研究においても，両概念を扱う際には，それが概念内のどのような側面を反映しているのか，また使用する尺度の欠点は何かについて慎重に検討する必要がある。例えば，加藤（1983）の同一性地位判別尺度の問題点としては，項目が少なく，地位設定がやや機械的であり，中間地位の概念的定義が明確でないことなどが挙げられる。また，詫摩・戸田（1988）の３カテゴリー尺度の問題点として遠藤（1992）は，過去の養育者との関係は必ずしも含まれておらず，アダルトアタッチメントインタヴューにおけるIWMの下位概念である可能性があると指摘している。つまり，詫摩・戸田（1988）の３カテゴリー尺度はあくまで現時点におけるIWMを測定するものであり，乳児期からの愛着の時間的連続性を説明し得ず，また，自己および他者に対する内的表象を説明するにとどまり，未来への予測と行動のプランニングというIWMの成分を説明していない可能性があるということである。さらに，本研究で使用した内的作業モデル尺度はAinsworth, et al.（1978）のSSP理論に基づいて提出された3カテゴリー尺度であるが，現在のIWM研究で主流になりつつあるのは，BowlbyのIWMの定義に基づいて提出されたBartholomew and Horowitz（1991）の４カテゴリー尺度である。４カテゴリー尺度の場合であると，自己観についてのIWMと他者観についてのIWMという２因子に加え，それぞれのIWMがポジティブかネガティブかによって４類型に整理する。そのため，４カテゴリー尺度によって測定されるIWMは自己観と他者観のIWMが混同されている３カテゴリー尺度よりも，IWMのより精緻な理解を可能にすると考えられる。中尾・加藤（2003）は，３カテゴリー尺度と４カテゴリー尺度の対応性を検討し，両尺度に一応の対応性を見出しているが，今後のIWM研究においては４カテゴリー尺度を用いることが適切であると述べている。また，本研究で使用した内的作業モデル尺度から得られた「安定」因子は，自己よりも他者への信頼感を主な成分とする可能性が考えられたが，４カテゴリー尺度を用いることで成分のより正確な解釈が可能になると思われる。以上の所見から，４カテゴリー尺度を用いて本研究を再検討し，本研究で得られた結果との対応性を確認することが今後の課題であると思われる。

謝　辞

本論文の作成にあたり，ご指導頂きました京都学園大学人間文化学部の川畑隆先生，行廣隆次先

生，並びに，調査にご協力して頂いた学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226－244

Bowlby, J. 1973 attachment and Loss vol. 2 Separation.（黒部達郎他訳　1991　母子関係の理論Ⅱ：分離不安　岩崎学術出版）

Brandt, D. E.　1977　Separation and identity in Adolescence：Erikson and Mahler－Some similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, **13**, 507－518.

Erikson, E. H. 1959　*Identity and the life cycle（selected papers of E. H. Erikson）*. Int. Univ. Press, New York（小此木啓吾編訳　1973　自我同一性　誠信書房）

Hazen, C. & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52－3, 511－524

Franz, C. E. & White, K. M.　1985　Individuation and Attachment in Personality Development：Extending Erikson's Theory. *Journal of Personality*, **53**, 224 －256

Marcia, J. E.　1966　Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551 －558

天貝由美子　1995　高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究, **43**, 364－371

遠藤利彦　1992　愛着と表象―愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観―　心理学評論, **35**, 201－233

数井みゆき・遠藤利彦　編著　2005　アタッチメント　生涯にわたる絆　ミネルヴァ書房

加藤　厚　1983　大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究, **31**, 292－302

加藤　厚　1986　同一性測定における２アプローチの比較検討　心理学研究, **56**, 357－360

杉村和美　1998　青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究, **9**, 45－55

高井真奈美・丸島令子　2006　青年期における内的作業モデルとパーソナリティの特徴について　神戸親和女子大学院研究紀要, **2**, 63－73

高橋由利子　2004　愛着理論とその測定方法―最近の文献研究より―　目白大学人間社会学部紀要, **4**, 53－66

詫摩武俊・戸田弘二　1988　愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―　東京都立大学人文学報, **196**, 1－16

鑪幹八郎・宮下一郎・岡本祐子　共編　1995　アイデンティティ研究の展望Ⅱ　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎・宮下一郎・岡本祐子　共編　1998　アイデンティティ研究の展望Ⅴ－1　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎・山下格（編集）　1999　アイデンティティ　日本評論社

谷冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究, **49**, 265－273

中尾達馬・加藤和生　2003　成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？―４カテゴリー（強制選択式，多項目式）と３カテゴリー（多項目式）との対応性―　九州大学心理学研究, **4**, 57－66.

永田彰子・岡本祐子　2008　重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴―信頼感およびアイデンティティとの関連―

山田みき・岡本祐子　2008　「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析　発達心理学研究, **19**, 108－120

山岸明子　1997　青年後期から成人初期の内的作業モデル：縦断的研究　発達心理学研究, **8**（**3**）, 206－217